

雄勝稲作情報

No.6 令和2年7月3日



発行 ● ことまち農業協同組合
 うご農業協同組合
 湯沢主食集荷商業組合
 湯沢市農業総合指導センター
 成瀬村農業総合指導センター
 秋田県農業共済組合
 監修 ● 雄勝地域振興局農林部農業振興普及課
 雄勝地方病害虫防除員協議会

生育状況について（6月25日現在）

田植：本年平均5月21日

雄勝地域振興局定点調査結果「あきたこまち」8地点平均（年平均5月24日、前年平均5月23日）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)
本年	40.2	516	9.3	46.2
平年	35.9	351	8.4	44.9
平年比	112%	147%	+0.9葉	103%
前年	35.8	380	8.9	46.0
前年比	112%	136%	+0.4葉	100%

6月25日現在の生育は、平年に比べて3日程度早まっております。ほとんどの調査地点で茎数が平年を上回りました。好天日が多く、気温が高めに推移したことから、生育が早まり、分けつの発生が促進されました。

中干し後の水管理について

中干し後は、間断かん水を主に水管理を行いましょう。茎数が十分に確保できていない場合は、強い中干しは避けてください。

近年、**中干し後から葉色が激しく変化し、作柄・品質の変動要因**となっています。**ほ場の過乾・過湿に注意し、茎の充実と根の健全化**を図りましよう。

残草対策について

～後期除草剤の一例～

残草がある場合は後期除草剤で処理ましよう。

残草の種類	除草剤名	使用時期 使用量
ノビエのみ	クリンチャーEW	移植20日～ノビエ6.0葉期まで 収穫日前30日まで 使用量100ml/10a 散布液量25～100L/10a
	トドメMF1キロ粒剤	移植後14日～ノビエ5.0葉期まで 収穫日前50日まで 使用量1kg/10a
	トドメMF乳剤	移植後14日～ノビエ7.0葉期まで 収穫日前50日まで 使用量200ml/10a 散布液量100L/10a
ホタルイ、コナギ、オモダカ等	バサグラン粒剤	移植後15～50日 収穫日前60日まで 使用量3kg/10a ※落水状態または浅水状態で散布
ノビエ及びホタルイ、コナギ、オモダカ等の同時発生	クリンチャーバスME液剤	移植後25日～ノビエ5.0葉期まで 収穫日前50日まで 使用量1000ml/10a 散布液量70～100L/10a

※詳しくはJAまたは農薬販売店へご相談ください。

生育診断を行い適正に追肥を実施ましよう

7月からはよいよ幼穂が発育し、収量や品質に大きく影響する大切な時期です。「生育診断」を実施し、**追肥の判定や水管理、防除**を適正に実施ましよう。

生育診断の時期は、平年であれば平坦部7月15日頃、山間部7月20日頃が目安です（あきたこまち、幼穂形成期）。

調査は水口や水尻を避け、生育が揃った場所で行います。畦畔から少しほ場の中に入り、生育の平均的な株を選びましよう。

●幼穂長を調べましよう！

平均的な株の一番背の高い茎を根をつけたまま抜き取ります。葉鞘を丁寧にむいて幼穂の発育状況を見ます。茎の中央部をカッターで真っ二つに切ると簡単に見ることができます（図1）。

幼穂長が1～2mmになった時点で「幼穂形成期」となり、出穂25日前と出穂時期を予測することができます（図2）。

図1 幼穂長の見方

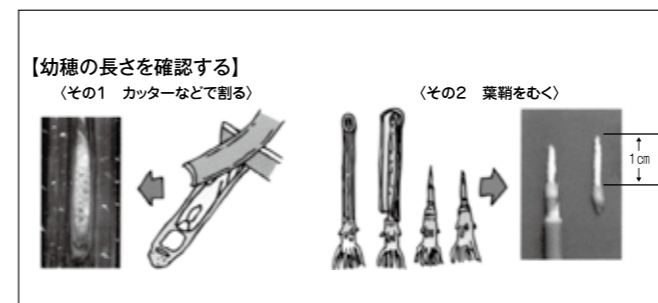
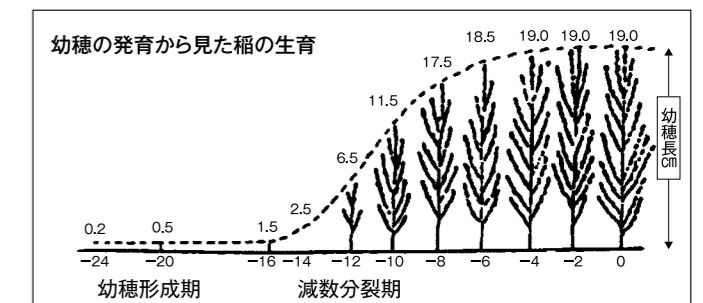


図2 幼穂長の発育から見た稲の生育



●幼穂形成期の生育診断（栄養診断）方法

- ① 草丈を測ります。幼穂形成期の目安は60～65cmです。
- ② 1株当たりの茎数を測ります。
- ③ 曇天や朝夕に太陽を背にして葉色をみます。葉色は上から2枚目の葉でみます。
- ④ 生育指数を計算します。

生育指数 = 草丈 × m²当り茎数。 ※m²当り茎数 = 1株茎数 × 坪当り茎数 ÷ 3.3

- ⑤ 生育診断（栄養診断）を行い、穂肥の可否を判定します。
- ⑥ 穂肥の判定について
 生育診断（栄養診断）で穂肥が可能となった場合は、生育型にあわせて窒素成分量で1～2kg/10a追肥します。

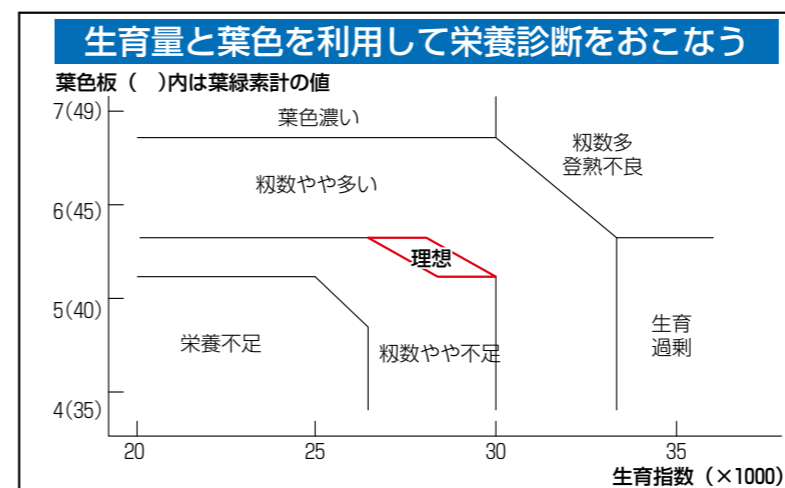


表1 穂肥の判定

生育型	倒伏の危険性	窒素追肥 (kg/10a)	
		幼形期	減分期
栄養不足	少	2	2
籾数やや不足		2	2
理想	大	ムラ直し1kg	2
籾数やや多		なし	2
葉色濃い		なし	ムラ直し1kg
生育過剰	大	なし	ムラ直し1kg
登熟不良		なし	なし

葉色カースケール（水稲用）



※あきたこまちの生育診断指標を参照

出穂期前の病害虫防除対策について

秋田県病害虫防除所の情報によると、斑点米カメムシ類の主要となるアカスジカスミカメの発生時期は平年並（前年より遅い）、発生量は平年よりやや多い（前年より多い）となっています。葉いもちの感染時期はやや早い（前年並）、感染量はやや少ない（前年より少ない）となっています。

●葉いもち

- ・まだ補植用余り苗を放置しているほ場があります。葉いもちの伝染源になるため、**直ちに土中に埋没処分**してください。
- ・苗からの持ち込みがある場合は早期に多発することがあるため、地域内の巡回を徹底し早期発見、早期防除に努めてください。
- ・持ち込みによる発病が確認された場合は、**直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤、ノンプラス剤、トライ剤）の茎葉散布**を実施してください。その後は、**必要に応じてビーム剤を追加防除**します。



葉いもち
縦に長いひし形の病斑。縦に褐色の線が伸びる。

農薬名	剤型			散布量 (10a)
	粉剤DL	ゾル	フロアブル	
ノンプラス	○		○	粉剤DL：3～4kg ゾル・フロアブル：1,000倍 (100～150L)
ブラシン	○		○	
ビーム	○	○		
トライ	○		○	
				粉剤DL：3～4kg フロアブル：1,000倍(60～150L)

注①) フサライド剤（ラブサイド・ブラシン）、トリシクラゾール剤（ビーム・ノンプラス）の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内、テブフロキシム（トライ）は2回以内なので注意する。

注②) トライは出穂20～10日前散布は稲こうじ病にも効果があります

●斑点米カメムシ類

- ・主要となるアカスジカスミカメは、**ノビエやホタルイ**等の雑草の穂に産卵するため、**これら雑草を防除することが斑点米の発生を抑えるポイント**になります。
- ・本田の薬剤散布は、**出穂10日後頃と同24日後頃**の2回を基本に行います。
- ・水田内の雑草除去を徹底するとともに、農道・畦畔の草刈りは稲が出穂する15日～20日前（7月20日頃）までに数回行います。
- ・出穂10日後頃の**薬剤散布後遅くとも7日以内**に草刈りを実施し、増殖源となるイネ科雑草をおさえましょう。※雄勝稲作情報No.5参照

●紋枯病

- ・紋枯病は、早植、出穂の早い年、窒素質肥料の多用、密植、多発年の翌年に発生が多く、出穂後高温多湿の年は病斑が上昇しやすくなります。
- ・穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%以上の場合に防除します。
- ・モンカット、モンセレン等の茎葉散布剤は、出穂直前～穂揃期に薬剤が株元までかかるように散布します。
- ・モンガリット粒剤を使用する場合は、出穂20～10日前に散布します（稲こうじ病との同時防除）。

散布時期	農薬名	剤型					散布量又は希釈倍数	使用回数	備考
		粉	液	水	ゾ	フ			
出穂直前～穂揃期	バリダシン	○	○				粉剤・DL 3～4kg/10a	5回以内	ア) 出穂直前の防除に重点をおく。 イ) 多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。
	バシタック			○	○		液剤 1,000倍	3回以内	
	モンカット	○		○		○	800～1,000倍 水和剤 1,000倍	4回以内	
	モンセレン	○				○	フロアブル 1,500倍		

●稲こうじ病

- ・前年に稲こうじ病が発生した圃場では、本年も多発する恐れがあるので注意します。
- ・感染時期は穂ばらみ期で、この時期に雨が多いと感染しやすくなります。発生すると等級低下に繋がるため注意が必要です。
- ・薬剤による防除法は次のとおりです。常発地では次のいずれかの薬剤で防除します。

薬剤名	散布時期	散布量 (10a)	散布回数	備考
ドイツボルドーA	出穂 20～10日前	100～150L	1回	希釈倍数：2,000～4,000倍
Zボルドー粉剤DL		3～4kg		銅剤は高温時には葉害を生じやすいので夕方の涼しい時に使用する
モンガリット粒剤		4kg	1回	湛水状態で均一に散布し、散布後4～5日は入水しない

☆カドミウム含有米発生対策について

カドミウム含有米が発生する恐れのある地域では、出穂前後各3週間は湛水管理を徹底しましょう。

中干しの時期を迎えています。梅雨明け後、乾燥が続くなどした場合は、ほ場により水不足の心配があるかと思えます。早めの中干し実施で根域の拡大を促すとともに、水不足が心配されるほ場では強めの中干しは避けるなど工夫しましょう。中干し終了後は、効率的な水の利用を心がけましょう。